

2025 年 10 月 19 日 収穫感謝礼拝(聖霊降臨節 第 20 主日)礼拝

メッセージ「備えよ常に」

牛田匡牧師

聖書 マタイによる福音書 25 章 1-13 節

10 月に入り、毎週末のようにあちこちで「だんじり」が曳かれたり、「太鼓」が練り歩いたりする秋のお祭りが開かれています。「だんじり」は、今からおよそ 300 年ほど前に、岸和田で始まったと言われていますが、元々は秋の収穫作業を終えての「収穫祭」として始められたのだそうです。農作業というものは、寒い冬が明け、春から夏、そして秋と毎日毎日、額に汗して一生懸命に田畑の手入れをして、それでも確実に収穫が得られるのかどうかは分かりません。作物に病気が出るかもしれないし、夏が暑すぎたり、雨が降らなさ過ぎたりしても、収穫を待たずに枯れてしまいます。また収穫を目前にしている、たった一晩の台風襲来で、全ての実りが駄目になってしまうこともあります。そのように、人間の努力だけではどうしようもできない、人間の力を越えた「大自然の力」「神の働き」というものが確かに存在しています。だからこそ、世界各地で大昔から、大地の実りを神様に献げて感謝する収穫祭が、様々な宗教で行われて来ているのだと思います。『聖書』の冒頭「創世記」でも、最初の人間であるアダムとエバのお話の後、4 章ですぐに彼らの二人の息子たち、人類最初の兄弟であるカインとアベルが、大地の実りと肥えた羊を神様に献げるお話が登場していることから、その歴史の古さを伺うことができます。

そしてまたそのような「収穫祭」では、恵みの神様に対して収穫物が献げられるだけではなく、それらで調理された様々なご馳走を、そこにいる人たち皆で分かち合って、一緒に食べたり飲んだりして、楽しいひと時を過ごし、苦労をねぎらい合うということも大切な側面でした。むしろ、現代の「おまつり」というのは、そちらの側面の方が強くなっているかもしれません。ですから、「誰に何を感謝しているのかは分からないけれども、とりあえずお祭りは楽しいもの、おいしいもの」となっていたら、厳密に言えば「本末転倒」となるわけですが、地域社会の伝統行事として考えると、それらを実施することには意味がないわけでもない、お祭りを作り上げる中で育まれる人と人とのつながりがあり、また力を合わせて作り上げる達成感があり、そこから元気を得て、また日常生活へと送り出されていくということも、確かにあるのではないかと思います。

皆が一つのところに集まり、神様に祈り、感謝を献げ、共に食べ、そしてまた日常生活へと送り出されていく。そのように聞くと、何か思い浮かぶものはないでしょうか。私たちが毎週日曜日に教会で行っているこの「礼拝」も、実はそれ自体が一つの小さな「お祭り」の形に他なりません。一つの所に集められ、同じ時間を過ごし、共に食べるというのは、神様への感謝の思いを共有するというだけではなく、具体的に私たちの日々の命を分かち合う、活かし合う、ということです。そしてその場には確かに神様が共にいてくださるからこそ、私たちは心も体も満たされて、新たに元気を得て、また日常へと押し出されていくのだと思います。さて、そのような「お祭り」は、収穫感謝に限らず、人の生涯で様々な場面で見られますが、その他

にもいわゆる「冠婚葬祭」の場面もまた、人間の力や計画を越えた、神様の働きを私たちに感じさせる大きな出来事だと言うことができます。そして今回の聖書のお話は、そのような婚礼の場面でのお話でした。

このお話は、「10 人の乙女」たちが花婿がやって来るのを待っているという場面でした。イエス様がこのお話を語られた紀元 1 世紀頃の古代イスラエル社会における結婚式、婚礼というのは、まず花婿が花嫁をその家まで迎えに行ったのだそうです。そして花嫁の家では、友人たちや婚礼に招かれたお客たちが皆で、花婿の到着を待っていて、花婿が到着するとそこから花嫁と一緒に、花婿の家まで婚礼行列をするというのが、当時の慣習でした。ですから、ここに登場する「10 人の乙女」というのは、きっと花嫁の友人たちであったのではないかと思います。古代イスラエルでは 1 日は日没から始まりましたから、婚礼の行列も夜に行われました。1 節「十人のおとめがそれぞれ灯を持って、花婿を迎えに出て行く」とは、この花嫁の家に集合したことを言っているようです。ところが結婚式の主役である花婿の到着が遅れ、行列がなかなか始まりません。というのも、花婿は結婚にあたり、花嫁の父親と最終的な結婚条件の交渉、結納の品や金額などを、取り決める必要があります、それには時間がかかることも珍しくなかったそうです。とはいえ、大切なハレの日ですから、花嫁の友人である乙女たちも皆、張り切っておめかしして着飾っていたと思います。それにもかかわらず、彼女たちが「皆うとうとして眠ってしまった」(5)と言う位ですから、花婿の到着はかなり遅れたのでしょう。

彼女たちは皆、行列に参加するために灯の用意をしていました。10 人の乙女のうち、5 人は愚かで予備の油を持っておらず、他の 5 人は賢くて予備の油を持っていました。そして真夜中に「そら、花婿だ。迎えに出よ」という時になって、愚かな乙女たちは、賢い乙女たちに頼みました、「油を分けて下さい。私たちの灯は消えそうです」(8)。しかしこの頼みは、無情にも断わられてしまいます。「分けてあげるにはとても足りません。それより、店に行って、自分の分を買って来なさい」(9)…。そして愚かな乙女たちが油を買いに行っている間に、花婿は到着し、賢い乙女たちと共に婚礼の行列を作って自分の家まで行き、婚宴の席に入ってしまった。その後、愚かな乙女たちがお店で油を買ってから、行列の後を追って花婿の家に駆けつけますが、「ご主人様、ご主人様、開けて下さい」(11)と言って戸を叩いたにもかかわらず、「よく言うておく。私はお前たちを知らない」(12)と言われ、その扉は開かれませんでした。何故、花婿である主人は、招待客であるはずの 5 人の乙女に、こんな冷酷な態度をとったのでしょうか？ 何故、予備の油を用意していた賢い乙女たちは、油を用意していなかった愚かな乙女たちに手持ちの油を分けてあげなかったのでしょうか？「店に行って買って来なさい」と言いつつ、本当に真夜中に油を売ってくれるお店がなどあったのでしょうか。そのようなことを考えると、このお話には不可解なところがたくさんあります。

教会では、このお話は、いわゆる「終末」、「世界の終わり」の時のことを表わしていると読まれて来ました。13 節には「目を覚ましていなさい。あなたがたはその日、その時を知らないのだから」という言葉がありますが、同じような言葉が、一つ前の章、「マタイによる福音書」24 章には、何度も記されています。そして、25 章

の 1 節でもイエス様が「天の国は、十人のおとめが～花婿を迎えに出ていくのに似ている」と(弟子たちに(24:3-4))語り始められている通り、このお話は天の国・神の国についてのたとえ話として理解されて来ました。そのために、「おとめたち」とは「花婿」であるイエス・キリストが「世界の終わり」、「世界が完成される日」に「再びやってくること」(再臨)を待ち望んでいる人々(クリスチャンたち)のことで、「花婿の到着の遅れ」はイエス・キリストの再臨が、今も尚遅れているということ。そして「婚宴」とは来るべき天の国のことであり、「戸が閉められた」とは「最後の審判」を表しているという風に読まれて来ました。しかし、では賢い乙女たちが持っていて、愚かな乙女たちが持っていなかった「予備の油」とは、一体何なのでしょう。それは「大事な瞬間」が巡ってきた時に、「準備ができていいる」か「できていないか」ということであり、その「準備」は、決して他人に助けってもらったり代わってもらったりすることのできないものなのだ、とも言われて来ました。どうでしょうか。確かに、私たちの人生においても、事故に遭ったり、病気になったり、準備がちょっと出来ていないまま、慌てふためくことがあります。自分の身に起こったことは、他人に代わってもらうことが出来ません。だからこそ、いつでも目を覚まして、覚悟をもって準備をしておくことが大切です。それこそボーイスカウトや、ガールスカウトのモットーである「備えよ常に」ということなのだと、そう語られて来ました。それこそ 9 年前の 11 月にも、私はこのお話でメッセージをしています、その時にはそのように語っていました。しかし、このお話を改めて読み直してみた時、このお話が私たちに告げているメッセージとは、本当にそうなのでしょう。

このお話が記された紀元 1 世紀頃には、世の終末は、「もう直、すぐに来る」と期待されていました。それが 5 年、10 年、100 年、200 年経っても来ずに、とうとう 2000 年以上が経ちましたが、まだ来ていません。それ程までに花婿の到着が遅れているにもかかわらず、「来るべき世界の完成の日」にやって来た花婿、主人は、油を何とか調達して婚礼会場に後から数時間遅れて駆けつけた乙女たちに「私はお前たちを知らない」と言って、扉を開けないのです。まさに「どの口が言っているのか」です。そもそも「10 人の乙女」がいて、「そのうちの五人は愚かで、五人は賢かった。愚かなおとめたちは、灯は持っていたが、油の用意をしていなかった。賢いおとめたちは、それぞれの灯と一緒に、壺に油を入れて持っていた」(2-4)のは、何故だったのでしょうか。単純に乙女たちの頭脳や能力の優劣の問題だったのでしょうか。「愚か」と「賢い」というように対照的に言われているのは、口伝えて伝承されて来た「昔話」によくある表現です。「予備の油が必要になるくらい、ちょっと考えたら分かるだろうに、それを用意して来ないなんて、何て愚かなのだろうね」とでも言いたげです。

しかし、当時の貧しい庶民たちの生活の実態を思うと、油は貴重品ですから、余分な油、予備の油なんて家にはないということも当然あったでしょう。ですから、今ランプの中に入っているだけで、そのランプを持ってくるだけで精一杯だったとしても、ちっともおかしくありませんでした。むしろ当時の庶民はランプなど使わずに、日の出頃から活動を始め、日が沈んだらあまり活動はしなかったのではないのでしょうか。もちろん、いくら特別なお祭りの日、婚礼の日であっても、夜通し灯をともし続

けるなんて、とてもできなかった。だから灯をともしずに待っていて、眠ってしまったというわけです。真夜中に花婿が到着した時、「油を分けてください」と愚かな乙女たちが頼んだ時、それに対して賢い乙女たちは「分けてあげるにはとても足りません」と答えましたが、この言葉の原文の直訳は、「私たちとあなたたちに、足りなくなることが決してないように」です。つまり「分けてあげることで、足りなくなったら困るから」ということです。そう考えると、何だかとても冷たい言葉だと感じます。

先週の「ぶどう園の労働者のたとえ」(マタイ 20:1-16)の際にも触れましたが、「天の国は、～に似ている」(20:1, 25:1)というギリシア語は、「似ている」の他にも、「たとえられる」や「比べられる」とも訳される言葉です。新共同訳では「たとえられる」と訳されていましたが、それを「比べられる」と読んでみることを提案しました。今回もそうしてみるとどうでしょうか。私たちが暮らしているこの世界では、一生懸命やっても、報われないことも多い。足りない油を分けてもらえず、行列を追いかけ行っても、宴会の会場にも入れてもらえないこともある。でも、天の国ではどうだろうか。「天の国の価値観というものを、このような冷酷な乙女たちや、主人と比べてみたらどうだろうか」。きっと、こんなではないはずだ、という反対の意味で、このお話を理解することができるのではないかと思います。

そのように理解しますと、このお話は、「天の国・神の国は、賢い乙女が入る所」という理解に対して根本的に問い直し、人間を「愚か」か「賢い」かで二分し、「愚か」で「役に立たない」とされる人々を切り捨てる「賢さ」や、人の世の「常識」そのものの問い直しを求めているのではないかと思います(山口里子『イエスの譬え話2』)。そもそもイエス様ご自身も、また弟子たちも、その周りに集まって来ていた人たちも皆、当時の社会の中で貧しく、小さくされていた人たちでした。生活にゆとりはなく、余分の物、予備の油を持たない人たちでした(マタイ 8:20)。それでも、そのような人たちが共に集まり、共に分かち合う中に、神様の力が豊かに働くことを、イエス様はその言葉と振る舞いをもって示されました。しかし、そのようなイエス様は、時の権力者たちから、恨まれ妬まれ、蔑まれ、そして十字架へと追いやられていきました。そのようなイエス様の歩みは、まさに世の中の常識からすれば「愚か」でした。ですが、そこにこそ真実の神の価値観が表わされていることを、私たちは知っています。

イエス様は何度も「神の国はもう来ている」と言われました。何百年後か何千年後かに「世界の終わり」がやって来るのを辛抱強く、忍耐して待つ、そのために「備えよ常に」ではなく、「今ここ」に神の国は「もう来ている」ということ。紛れもなく「今ここ」にもイエス様が共にいてくださっているということに信頼して、周りにいる人たち、隣にいる人たちと一緒に、たとえ予備の油の手持ちが無かったとしても、無いなりに対策を考え得る限りで一步を踏み出してみること、そのことこそが「備えよ常に」という言葉の意味なのではないかと思います。与えられた収穫物、恵みや能力は、独り占めするのではなく、みんなで分かち合っこそ、喜びも元氣も湧いてくるのだと思います。私たちは今日も、ここから分かち合い、共に生かされていく道へと押し出されて参ります。